

打動作習得の授業づくり

—第3学年 「ティーボール～遠くへとばそう～」の実践をもとに—

須山博充

1 問題の所在

休み時間になると、グラウンドに子どもの声がこだまする。思い思いに自分の好きな遊びに興じている。男の子は、サッカーや手打ち野球。女の子は、一輪車、縄跳び、竹馬など。大まかではあるけれど、男女にそんな傾向が見られる。そういえば、これから紹介するティーボールを授業で行う際、数名の女の子が次のようなことを言った。

「先生、今度は男の子の運動をするんじゃないね。」

休み時間の遊びの傾向は、男女の興味・関心の違いともいえる。サッカーや野球をしているのは、ほとんど男の子という実態から、先のような発言となったのであろう。

近年、「ジェンダー・フリー」の語が使われ始め耳新しい。ジェンダー・フリーとは、性別にこだわりすぎず、性別に関わる固定観念、すなわち偏見を持たないで行動するということらしい。この性別に関わる固定観念がいつ内面に巣くうのかはわからないが、興味・関心の差からくる行動の違いは、小学校の低学年においてもはっきりと表れている。

興味・関心の差は、当然、技能の差にも表れる。小学校高学年で、バスケットボールやサッカーで男子対男子、女子対女子の授業形態が見られるのも技能差によるところは大きい。(異性との接触到抵抗を示し始めるため、その運動に没頭できない、本気でプレーできないということもあるらしい)かくして、中学、高校でその差は一般的に顕著となる。

このように、個人技能の差は学年があがればあがるほど広がり、ただ単にルールを工夫してゲームを行ったり、場を工夫して運動を行ったりするだけでは、それぞれの自己実現的欲求(遊戯、競争、達成、探索・探求、表現・創造欲求など)を満たすことは難しくなってくる。

興味・関心の個人差はあれ、各運動の基本的な技術習得保障を低・中学年のうちからしっかりとしておく必要があると考える。特に「打動作」は、男女差だけでなく、運動経験の差による技能差も大きいだけに意図的に授業の中で取り上げ、どの子にも「打動作」の基本を身につけさせたいと考え、以下の実践を行った。

2 実践事例—「ティーボール～遠くへとばそう～」(第3学年)—

(1) 単元について

ティーボールは、ハンドベースボールやソフトボールに似たゲームであり、バッティングティにボールをのせ、その静止したボールを打って遊ぶゲームである。(本実践では、ティーバッティングで飛距離を得点化し、勝敗を競うゲームとして行った)ボールが静止しているため、誰でも打つ喜びを味わうことができる。

本学級の児童は、1学期にハンドベースボールやラケットやプラスチックバットを使ったベースボールを経験している。そこでは、野球型運動種目のゲームになれること、自分たちにあったルールや方法でゲームを楽しむことが学習の中心であった。

(2) 指導目標

- 遠くへとばすための自分にあった打つ条件を見つけることができるようにする。
- まわりの安全に気をつけて、打つことができるようにする。
- 打つ技術ポイントについて、互いに見合い、教え合いながら、仲良くゲームを楽しむことが

できるようにする。

(3) 学習内容と指導計画 (全 5 時間)

- 第一次 止まっているボールを打つのになれよう (ティーバッティング) …………… 1 時間
 第二次 遠くへとばそう (ボールを捉える位置・立つ位置等) …………… 4 時間

(4) 授業設計の焦点

より醍醐味をもって野球型種目のゲームを楽しむ (高学年への発展) ためには、技術への着目は必要不可欠であると考え。そこで、投げる、捕る、打つ、走るのうち、特に野球型種目の特徴であり、子どもたちにとっても一番興味・関心のある「打つ」技術に焦点を当てた授業構成を考えた。

一口に「打つ」といっても、遠くへ打ったり、ねらったところへ打ったりと、「打つ」技術も様々である。遠くへとばすためには、ボールの芯をバットの芯で捉え、強く振り抜くことである。ねらったところへ打つには、さらに力の加減を調整しなくてはならない。打動作習得過程において、力の加減を調整して打つことは、遠くへとばすことよりも難しいと考え、また、野球の醍醐味からも遠くへとばすことを全体の共通課題とした。そして、ボールを捉える位置、立つ位置等、自分にあった条件を見つける授業とした。その際、距離を得点化し、数回打ってその得点の合計、または最高得点の回数によって、個々の飛距離ののびを把握させるようにした。

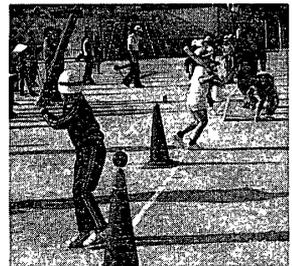
(5) 準備物

棒20本、プラスチックバット 8 本、KENKO SOFTYBALL 24個、カラーコーン 8 つ
 バッティングティー (ペットボトル)

(6) 指導の実際

第二次第 3 時の授業展開をもとに、概要を述べてみたい。

学 習 活 動	指 導 ・ 支 援 活 動
1 準備運動をする。 2 本時の学習課題を確認する。	1 棒を使って、腰の回転等を意識させる運動を行う。 2 本時の学習課題を提示する。
どこに立てば、遠くへとぶか確かめよう。	
3 ティーバッティングをする。 ◎自分にあった条件を意識して取り組む ○全体の場で条件の確認をする。	3 できるだけ一人ひとりが数多く打てるように、1 グループ 5 人の 8 グループで練習させる。その際、1 人は打者、3 人は守備、1 人は打者がボールのどこをたたいているかを確認させるようにする。 ◎ 立つ位置によっても、ボールを捉える位置、腰の回転からミートの瞬間の力の入り具合に違いがあることに気づかせたい。
4 ティーボールゲームをする。 ・打者一巡制 (1 ~ 2 回) ・赤対青 白対緑	4 前時の自分の得点記録と比較できるよう、チームカードを用意し、記入させる
5 本時のふりかえりをする。	5 本時のふりかえりして、次の点について確認する。 ・前時の得点との比較



【学習活動1】…準備運動

打つ動作で、よく見られるのが腰のひねりを使わずに、手だけで打とうとする姿である。いわゆる手打ちである。

そこで、腰のひねりを意識させようと、毎時間、二人一組で互いに後ろ向きで立ち、腰をひねって棒を渡す運動を行った。

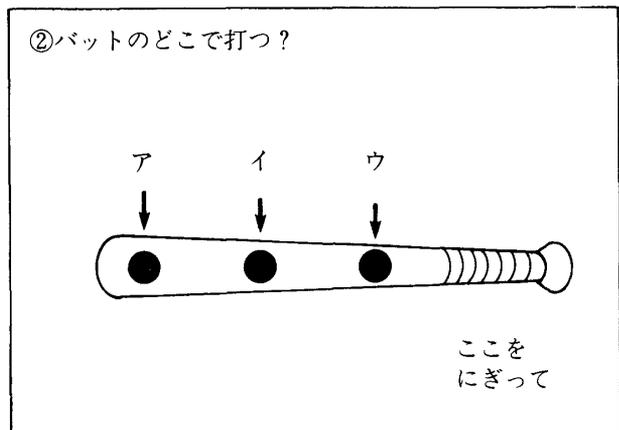
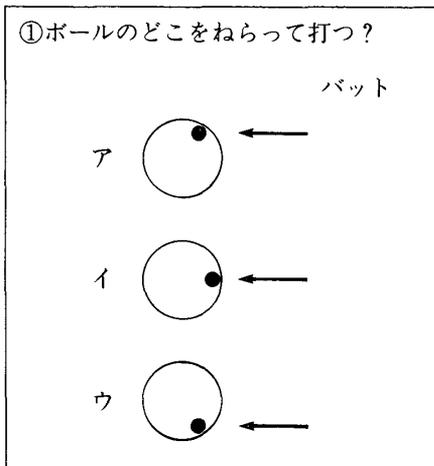
また、バットを持つとき、右打ちと左打ちではバットの握り方は違うが、これも腰の回転のあるスイングでは、その握り方の妥当性を意識できるが、腰の回転のないスイングでは、どちらの手を上でどちらの手を下にしようとするの難しさは感じ得ない。

そこで、これも二人一組で互いに向かい合って棒を持ちひねりっこをさせ、どちらの手を上を持ってきた方が、より力が入るかを確かめさせ、どのように握ったらよいか考えさせるようにした。

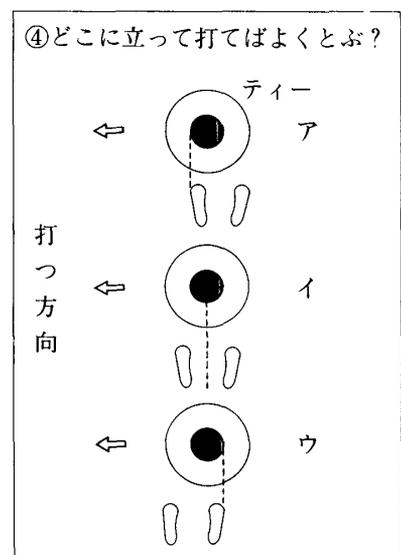
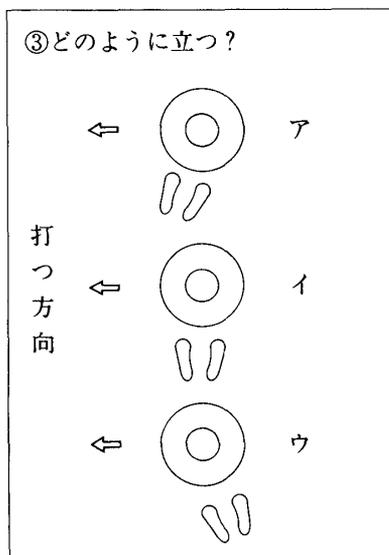


【学習活動2】…学習課題の確認

本時までには、①ボールのどこをねらって打つ、②バットのどこで打つ、③どのように立つという学習課題を、実際に打って確かめながら確認してきた。



本時は、④どこに立てば、遠くへとぶかという課題で、スイングする過程で、ボールをどの位置で捉えたらよいかを考える場面を設定した。



【学習活動3】…ティーバッティング

本時の学習課題のもとに、ひとり3球以上打って、自分にあった条件を見つける場とした。その後、全体の場で条件の確認を行った。結果は、下の表のとおりである。

表1 ボールのどこをねらって打つ

ア	イ	ウ
2人	22人	14人

表2 バットのどこで打つ

ア	イ	ウ
22人	15人	1人

表3 どのように立つ

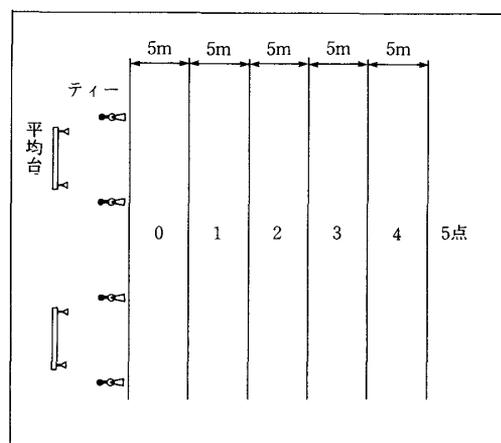
ア	イ	ウ
4人	24人	12人

表4 どこに立って打つ

ア	イ	ウ
13人	26人	1人

【学習活動4】…ティーボールゲーム

ティーバッティングと同じ要領で、右図のようにとんだ距離を得点にかえ、5対5の全員の得点の合計で勝敗を競うゲームを行った。守備側は、途中でボールを捕らず、ボールが最初に地面に着いたところを確認すること、球拾いとした。



【学習活動5】…ふりかえり

条件が加わることによって、前時と比べ打ち方や飛距離ののびがどのように変わったか、またグループ練習でのかかわりの様子についてのふりかえりを行った。

ティーボール

1◎ 2◎ 3◎

2回目のティーボールで、こう、とづくにははせるように、なりました。

今日は、ボールの時は◎をうて、うつときは、イでつちました。こんどは、もっととがように、いろんな人にきいたり、じぶんのきろくの、5点をこして、がんばりたいです。

このあたり

先生から

1つは、ボールの時に、ボールの位置を、2つ目は、遠くへ飛ばすコツが見つかるといいね。

学習カード

ティーボール～遠くへ飛ばそう～

名前 ()

<遠くへ飛ばすためのコツを見つけよう>

3つ直前に力を入れて、球中をねらうとよく飛びます。

足をかたははにひらき、こしをよく回すことを入ると、さうによく飛びました。バットのひるをアカイにするこしも大切でした。

3 考 察

ここでは、主に第二次第3時の授業を研究授業として、以下の仮説で分析を行ったことをもとに考察してみたい。

(1) 仮説

飛距離を得点化したゲームを行うことを前提に、課題を意識して練習に取り組むならば、遠くへとぼすための自分にあった条件を模索しながら自己決定し、ゲームにおいてもそれを意識した「打つ」動作が見られるであろう。

(2) 分析

「立つ位置に着目する」ということが、課題として適切であったか。

《自分にあった条件を意識して取り組む場面》

本時は、どこに立てば遠くにとぶかを学習課題に設定したが児童の多くは、ボールを打つこと、とぼすことがめあてになっており、立つ位置について十分意識して取り組んでいたとはいいがたい。

立つ位置にマークを設置し、ボールを置く子が打つ子に、「最初はアだね」と声かけをするなど、立つ位置の意識化を図る工夫が必要であった。



《全体場で条件の確認をする場面》

半数以上の児童が、イの位置に立って打つとよくとぶとした。しかし、「なぜ、その位置だとよくとぶのか」という問いには、「ボールが身体の真ん中に位置し、目の前にあるから」、「アでは振り遅れになるから」と答え、また、アと答えた者の中にも、「前に振っていけるから」という発言も聞かれたが、全体的に遠くへとぼすということと立つ位置がどのように関係するのかが、十分に体得できていなかったようだ。いつもではなく、たまたまその位置に立ったときに遠くへとんだと実感する者が多いように思われた。

このことから、「立つ位置」から腰の回転や体重移動を気づかせることは、3年生の児童にとって難しかったと思われる。打動作の運動イメージを形成するためにはまず、動きに着目するように支援することが子どもの感覚に訴えやすかったと考える。



<例>

「どんな感じでバットを振ると遠くへとぶか」→ビューンと振る（するどいスイング）→腰の回転を素早く

◎ 学習課題①・②については、ほとんどの児童が自分で確かめた条件を意識してゲームにも臨んでいたが、課題③・④については、十分に意識することは難しかったように思われた。全体を通して、質の高い自己決定にまでは至らなかったと考えられる。

4 実践を振り返って

○ ひとりひとりに打動作を身につけさせるには、できるだけ打つ回数を保障することが必要に

なってくる。そこで、カラーコーンとペットボトルを用いてティーを作って、ティーバッティングをさせた。ペットボトルの切り口の長さをかえることによって、若干の高さ調整はできるものの、市販のティーボールセットに比べると微妙な高さ調整はできない。しかし、一番背の低い子でも無理のない高さで打てることから、ペットボトルとカラーコーンのティーでも、3年生から十分使用できると考えられる。そして、学校にあるものを利用して、一斉に多くの児童がバッティングできることのメリットは大きい。

(プラスチックバットを使用したということもあったが、カラーコーン、ペットボトルの破損は全くなかった)

- 児童の実態からゲームを好むということ、練習だけでなく、ゲームの中でも「遠くへとばす」ことを意識して取り組めるだろうという見通しのもと、第二次第2時より、ティーバッティングをゲーム化して行った。しかし、思ったよりも時間がかかったこと、ふりかえりノートの記述に打動作ではなく、ゲームの勝敗にこだわる記述が多く見られたことなど、本単元でゲームを行うことについては再考の余地を残した。

打動作習得をねらいとして、知的にわかることを身体のイメージでわかるというところまで引き上げるには、ゴルフの打ちっ放しのようにもっとその動きを繰り返して練習する必要がある。ゲームを取り入れることにより、練習時間の保障が十分でなく、打つというイメージを引き出す授業構成が弱くなったと考えられるからである。

- 「遠くへとばす」ことが、児童の中にホームランを意識した下から上へすくい上げる（フライを打つ）打動作が多く見られた。(表4, 学習カード参照) これは、ティーボールのように静止したボールを打つならば、そのポイントをねらって打つことも可能であるが、投げられたボールを下からすくい上げるように打つことは、必ずしも遠くへとぶことにはならず、また空振りの可能性も考えられる。「遠くへとんだら気持ちがいいだろう」という思いで設定したのだが、それを「遠くへとばす」方に焦点を当てるのではなく、「気持ちよくとばす」方に焦点を当てていれば、もっと子どもの感覚に訴えて切り込む授業構成が考えられたかもしれない。



5 終わりに

本実践において、「3年生という段階で、どのような形で技術習得を図っていくことがより望ましいのか」「3年生という段階で打動作習得の授業が妥当であるかどうか」など、課題もいくつか見つかった。

4年生では、この3年生の実践をもとに、本来のティーボールとしてのゲームを行ってみようと考えている。今回の実践がどう生かされているか、はたまた生かされていないか、打動作習得の授業づくりは研究の途についたばかりであり、結果が楽しみである。

<引用・参考文献>

- 深谷和子「ジェンダーフリー — “らしさ” からの脱皮—」学校体育 1997年2月号
- 日本ティボール協会「ティーボール オフィシャルガイド& ルールブック」ベースボールマガジン社
- 貞比良 久「野球型ゲームに取り組んで」1994年賀茂・東広島教育研究集会発表冊子